
--kingsword--

skyblack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

――kingword――

【Nコード】

N3468V

【作者名】

skyblack

【あらすじ】

勇者となり勇猛に戦場を駆ける。

そんな夢を見続ける少年、浅谷幹士。

幼いころから捨てきれない夢はある日突然実現してしまう。

呼び出された異世界、握った剣。

ただ一つ違うのは、

「今日から貴方様はこの国の王です」

「えっ!?! 王様? 勇者じゃなくて?」

本当の王道ファンタジーここに開幕!

夢では勇者

無限に広がる蒼穹、視界を染める新緑の草原。

吹く風は澄み、体を満たす空気が暖かい。

右手に握った一振りの剣に視線を落とす。

ずっしりとした重みを再び意識する。

一メートルはあろうかと言うその剣を俺は難なく振るう。

この剣は確かに重い。だが、俺はそれを軽々振るう事が出来る。

それはなぜか？

そんなこと答えるまでもない。

理由は単純、答えは明快。

俺が選ばれた人間だからだ。

「浅谷幹士！」

そう、俺の名は浅谷幹士。

この世界に降り立った勇者の名だ。

「アサヤミキト！」

わかってるって。俺の名はアサヤミキト。

この世界に降りたっ「浅谷！返事をしろ！」

「はいっ！」

俺は勢いよく体を起こす。

視線の先にはスーツに身を包んだ担任教師。鎧に身を包んだ騎士でも、数多の戦場を駆け抜けてきた傭兵でもない。

辺りから聞こえてくる声も勇者の俺に与えられる賛美の声ではなく、嘲笑の声。

「ここは学校だぞ浅谷。また勇者の夢でも見てたのか？」

その言葉でいっそう大きくなる笑い声。

「いえ…あの、すみません」

そこでようやく俺の意識が完全に覚醒する。

ここは俺の通う高等学校。

そして俺は……ただの学生だ。

——1——

「はい、じゃあ今日はここまでだ」

授業終了のチャイムが鳴り響く中、教師がクラス委員に号令を動かす。

俺は緩慢な動きで立ち上がり、今日五回目の言葉を口にする

「ありがとうございました」

このありがたいと言ったという言葉にどれ程の感謝が込められ

ているのだろうか？

本来相手への感謝と敬意を含んだこの言葉は非常に大切なものだ。だが、学校教育の中でこの言葉はまるで使い捨ての紙コップのような扱いを受けている。

果たして、この状態が正常だと言えるのだろうか？

このままでは若者は感謝の言葉を軽視し、そのうち感謝という感情すら軽んじてしまうのではないか？

「まあいいや。帰ろ」

大げさな言い方してみたが、俺はただこの学校ってやつが嫌いなだけだ。

別にクラスでいじめられてるとか、壊滅的な程勉強が出来ないとかそういうわけじゃない。

クラスの金原君はクラスの奴らに仕組まれたゲームを無理やりやらされ、罰として昼食代を巻き上げられるといういじめを毎日受けるし、拳沢君は九九すら出来ない根っからのヤンキーだ。

そんな奴らに比べれば、俺はいたって普通。

だから、本当にただ単純に学校ってものが嫌いなだけだ。いや、厳密に言えば違う。

俺は冒険がしたいんだ。

勇者として一振りの剣で魔物と戦い、闇に覆われた国を助け、美しい姫と結婚する。

そんないまどき小学生でも見ないような夢を俺はいまだに追いつけている。

忌々しい悪魔の城をあとにして、足早に我が居城に向かう。

「ただいま」

我が家のドアを開け、誰もいない家に挨拶をする。

父は仕事で母はどうせ趣味のカラオケだろう。妹はまあ、やんちゃだからどっかで遊んでんだろ。

冷蔵庫を開け、麦茶で喉を潤す。

今日はやけに蒸し暑いな。

こんな時は部屋で少々早いエアコン解禁しかないだろう。

階段を駆け上がり、自室に入る。入ると同時に施錠も忘れない。

俺の部屋はいたってシンプルだ。部屋を埋め尽くす本、そして本、とどめの本。

勿論ジャンルはファンタジーの一択。

その中から読みかけの一冊を選び、ベッドに横たわりながら読書を開始する。

物語は今、ライバルキャラの死で主人公の力が覚醒し最後の敵との激戦を開始した所だ。

「なかなか熱い展開だな」

ぞくぞくしながらページをめくっていく。手に汗握るバトルシーン

の連続。

『読書中で申し訳ないんじやが、少しいいかの?』

「ちょっと待ってよ、もうチョイなんだから」

『ほんの少しでいいんじや』

「ダメだって、こういうラストシーンは一気に駆け抜けて読まなきゃいけないんだよ、その為に昨日こない所で止めて必死に寝ようとしたんだから!」

そのせいでなかなか寝付けず、今日は授業中に居眠りするハメになったんだ。

「大体、勝手に部屋に入るなっっていつも言っ……」

そこでようやく異変に気付く。ドアは空いてないし、部屋には俺しかいない。

それなのに、俺は誰と会話してるってんだ?

『一言二言言ってくればよいんじや』

「うわっ、うわあああっ!」

思わず絶叫してしまう。

何処をどう見まわしたってこの部屋には誰もいない。それなのに声は聞こえてくる。

外からかと思ったけど、そうじゃない。まるで耳元で話しかけられているように声ははっきりと聞こえる。

「なに、なんなの?これ?」

『驚きついでにベルネと言ってくれんか?』

慌てる俺を尻目に不可思議な申し出をする正体不明の声。
ベルネってなんだ？明らかに日本語じゃないと思うんだけど。

『男は度胸じゃ！ほれ、思い切って言ってしまえ』

「う、うるさいな！分かったって。べっ、ベルネ！」

直後、まるで鍵を開けるような音が響く。

「おいっ！言ったぞ、これでいいのかよ？」

『感謝するぞ、浅谷ミキト。そしてようこそアストリエへ』

その言葉を最後に、俺の世界は暗転した。

死体の海で剣は踊る

「そろそろ起きぬか。いいかげん寝過ぎじゃ」

声が聞こえる。

沈殿した意識が徐々に浮遊を開始する。

「起きんと殴ってでも起こすぞ」

聞こえる声によく違和感を感じる。

おいおい、どうしたんだよ母さん。わざわざ俺を起こすためにそんなジジイみたな話し方しなくてもいいだろ。

「大体、やるならババアみたいな話し方でしょ」

起き上がりながら、突っ込みを入れようと目を開く。

「やっと起きたか。全く、困った奴じゃ」

硬直。

凝視。

混乱。

目の前には本当のジジイがいた。

干物のように枯れ果てた肌。胸まで届く白いひげ。頭から足の先まですっぽりと覆う長いローブ。極めつきには赤い石を嵌め込んだ木の杖まで手にしてる。

「ゲームみたいなコスプレだね母さん」

「どうして母親の部分だけ譲らんのじゃ」

目の前のジジイが俺の頭を軽く小突く。

「よく辺りを見てみるとよい。ここがお主の自室に見えるのか？」

言われて、気付く。ここは俺の部屋じゃない。

周囲を囲むように大木がそびえ、小さなログハウスが一つ。俺の部屋はおろか、日本であるのかすら疑わしい光景。

「ここ、どこだよ？」

当たり前の疑問が口から零れる。可能性は低いが誘拐という場合もある。一気に緊張感に身を包まれた。

「やれやれ、さっき言った言葉も忘れてしまうのか？お主は。ここはアストリエと言ったであろう」

「アストリエ……？」

聞き覚えのある言葉だった。ほんの数分前に聞いた聞きなれない言葉。

ベルネとアストリエ。

「アンタ、もしかしてさっきの声！？」

「ようやくか。今回もハズレかう？」

俺のひらめきとは対照的に目の前のジジイはがっくりと肩を落とす。

「まあよいわ。仕切り直そうかの」

ジジイはボロボロのローブを軽く払い、咳払いを一つする。

「ようこそアストリエへ、浅谷ミキト。この世界の代表としてお主を歓迎する」

ジジイの言葉に合わせるように一陣の風が駆け抜ける。夢の中で何度も味わった澄みきった風が。

「お主は今混乱しているじゃろう。だが、それは恐怖にはならんはずじゃ」

ジジイが不敵に笑う。

その通りだった。俺は今混乱している。

でも、これまたジジイの言うとおり。恐怖など微塵も感じていない。この感覚はそう、さっき本を読んでいた時と同じ感覚。

「この先は……」

ジジイはもったいぶるように言葉を切る。だが、別に言われなくてもその言葉の先は分かってる。

「俺の夢見た冒険だろ？」

ジジイはまた、不敵にほほ笑んだ。

ジジイ……改め、名前はノルイードと言らしい。
儂の名前を知らぬものなどこの世に居らんぞとか何とか言っていた
が、そこら辺は忘れたので省略。
まとめると、どうやら有名な爺さんらしい。

「お主を呼んだ理由は唯一つ。頼みたいことがあるのじゃ」

ノルイードの言葉に呼応して俺の心臓が早鐘を打つ。
夢に見ていた世界、憧れた冒険が今始まろうとしている。それを考
えると、興奮を抑えることなんてとても出来なかった。

「それで、俺はなにをしたらいいんだ!？」

「おお、今回もやる気だけは十分じゃな」

ノルイードは感心したというようにひげを少し撫でる。
もちろん、今の俺はやる気に満ちている。

これからなにをするか考えるだけで鳥肌が立つ。

「それでは、さっそく本題に入ろうかの」

そこで、空気が変わる。

今までの暖かな雰囲気がノルイードから消失した。
表情も、声色も、何一つとして変わって無いはずなのに、空気が重
い。息がしづらい。

「おっ、おい。急に真剣になるなよ。びっくりするじゃんか」

空気に耐えられず、軽口を挟む。

それでもこの重たい空気は変わらない。いや、むしろ一秒ごとに濃度が増しているようにすら感じられる。

「残念じゃが、歓迎ムードはここまでじゃ」

そう言って、ノルイードは持っていた杖を軽くふるう。

嵌め込まれている赤い石が光の軌跡を描く。

そして、世界が歪み出す。

辺りを取り囲んでいた大木が急速に枯れていく。葉が落ち、枝が折れ、幹がしぼみ、遂には崩れおちてしまう。
小さなログハウスも同様だった。

全てが死んでいく。

そしてその死の対価のように、代わりにあるモノが浮かんでくる。

「――っ！なんだっこれ……」

現れたのは無数の死体、死体、死体死体死体死体死体死体死体死体死体

足の踏み場もない程、いやむしろ俺とノルイードの足がある場所以外の場所は全て死体で埋め尽くされている。

「おい、冗談キツイよジジイ。こういうの俺：ホント苦手……」

こみ上げる嘔吐感を何とか抑え込む。恥ずかしいとかそんな理由じゃない。ここで吐いたら、この死体の海に手を着くことになる。そんなの想像するだけで忌々しい。

「どうした？そう邪険にするでない」

だけど、ノルイードの言葉で、嘔吐感すら吹き飛ぶ。

「これは全て―お主の死体なんじゃから（・・・・・・・・・・・・・・・・）
」

意味が、分からなかった。およそ理解が追いつかない。

このジジイはなにを言っている？

この無数の死体が俺？全く理解できない？

でも、嘘だと思えない。

だって、こいつらが着ている服に見覚えがあるから。全員が同じ背丈をしているから。

そして何より、顔が俺だから。

「うっぷ……」

こられ切れず、胃の中の物を逆流させてしまう。

人の頭は見たくないものを意図的に切り捨ててしまおうって話は本当だったらしい。

そう、よく見たら分かる事だった。全ての死体がうつ伏せな訳じゃない。仰向けのものもあるんだから。

それにこれまでのノルイードの言動も、思い起こせばおかしかった。まるで俺が訪れるのが初めてではないような言葉。

「ホントに、これ全部俺なのか？だって……俺はここで生きてるじゃんかっ！」

思わず叫び声になる。

だってそうだ。俺はここにいます。ここで生きてる。それなのに確かにここには俺が死んでいる。

「そうじゃよ。ここで死んでいるのはお主じゃ。そしてまた、それを見て今俺と会話しているのもまた、お主じゃ」

ノルイードの冷淡な声が俺の感情を揺らす。

「今お主がおるこの世界と、これまでお主がいた世界は同一時間軸にある世界では無い。だからこそ、お主をここに呼び出すことが可能なのじゃ」

ノルイードは俺の死体を踏みつけながら、ゆっくりと俺に近づく。

「じゃが、そこでおかしいとは思わぬか？何故、お主はあのタイミングで俺の声に反応したのか？異なる時間軸にいる二人をつなぐ会話とは何なのか？」

ノルイードの言っていることが分からない。

「答えは単純じゃ。あの瞬間、お主は既にこちらの時間軸におったのじゃよ。前後数分を切り取り、そのままこちらの時間軸に組み込んだ。これが、あの時の会話の正体。そして、ここに散らばる数多の死体の正体でもある」

既に目の前まで来ていたノルイードが俺の頭を優しく撫でる。皮と骨だけのその手はまるで死神の手のようにだった。

「お主は、ここでは七万二千四百九十一人目の浅谷ミキトなのじゃ

よ。最初の浅谷ミキトはお主が儂との会話を初めた約二ヶ月後のお主じゃ。そこから時間を切り取り続け、今のお主にいたる」

そこで、ノルイードはカカツと笑いを漏らす。

だが、そんな話俺からしたら一ミリも笑えない。

「じゃあ、お前は俺の時間を切り取っては殺し、ずっと俺を殺し続けてきたってことか…?」

当然ながら未来を知ることなんてできない。今の俺が死んだら、次は前後数分ならば恐らく麦茶を飲んでいる頃だろう。そのタイミングで俺はコイツの声を聞き、ここに呼び出される。その繰り返し。

「さてさて、儂がお主を殺したなど言ったか?」

「うるさいっ! いまさらとぼけるなよ。ここにはアンタと俺しかいないんだ。だったら答えは一つだろ」

頭に乗せられた手を思い切り振り払う。それでも、離れることはできない。自分の死体ならばこそ、余計に踏むなんてことは出来ない。

「確かに、そう考えるのが正常か。今までもその答えに行きついておるから不思議はない。だが、違うのじゃ。ここにおるお主らは皆試練に敗れ死んだのじゃ」

「試練だと……?」

「そうじゃ。儂が頼み事をするに足りる人物なのかを見極めるための試練じゃ」

そう言って、ノルイードは杖で今度は俺の胸を小突く。

それなのに、俺の体が押されることは無い。押しつけられた杖がそのまま俺の体を通過する。

そして、俺で無い何かを押し出した。

「さあ、見せてくれ浅谷ミキト。お主の七万二千四百九十一回目の戦いを！」

初めて声を荒げるノルイード。

その見つめる視線の先。俺の後ろには黒い塊が存在した。

――2――

身長は俺と同じ。だが、それ以外は俺とは全く違う。

黒い。全てが黒い。人と言うよりはただ黒を固めて人型にしかただけの様にも見える。

そいつはゆっくりと自らの左腰の部分に手を掛ける。

そこにはなにも無い。だが、そいつの体同様、黒い何かを引き抜かれる。

「剣……？」

形は定かでは無いが、確かに剣のようだった。黒い剣。刃が付いているのかも分からない。

「今回は騎士か。さてどうなるかの？」

「騎士？おい、コイツはなんなんだよ！」

どうやらノルイードはこの黒い塊がなんなのかを知っているようだった。

それなのになにも話そうとしない。

その間にも黒い騎士はゆっくりと俺に近づいてくる。

右手に握った黒い剣を両手でしっかりと握り直す。そして、俺の目の前でゆっくりと剣を振り上げた。

「おいおいおい、まじかよっ！」

間一髪。

飛び退いたからよかったものの、俺がいた場所には黒い騎士の剣が振り降ろされていた。

なるべく自分の死体に触れないようにしながら距離を取る。

「どうした？少しは戦わんか。さもなくばそこらへんに散らばつとる自分と同じ末路を辿るだけじゃぞ」

「同じって……じゃあコイツが？」

コイツがここに散らばる無数の死体を積み上げたってのかよ。もう一度辺りを見回す。

見える光景は変わらない。死体の山だ。こんな地獄をコイツ一人で作ったとしたら、それこそ抗える気がしない。

「ジジイ！戦えって言うならなんか武器をよこせよっ！素手じゃ無理だって！」

そりゃそうだ。敵は武器を持ってるんだ。俺にも何か渡してもらわなきゃ不公平だ。

「お主はもう持っておるよ。そやつに抗う力をな」

「何言ってるんだよ！俺は武器なんて……」

ノルイードと話している間にも黒い騎士が攻撃を再開する。

今度はさっきとは違う。地をしっかりと踏みしめ、疾風となって俺に接近してくる。

駆ける速度を殺す事なく、今度は真横に剣を振りかぶる。

ヤバいつて！こんなの避けられる訳無いだろ。

その時、カクリと腰が落ちる。死神の鎌は俺の頭上ギリギリを掠め、空振りに終わる。

どうやら、俺の死体に足を引っ掛けたらしい。なんか運命めいたものを感じるな。

「でも、まぐれもここまでってか…」

見上げれば、黒い騎士は追撃のため、既に剣を振りかぶっている。顔も無ければ意志も感じられない無機物の騎士に容赦などあるはずもない。

単純な事だ。コイツが剣を振り降ろして俺はこの死体の海の仲間入りするだけだ。

死の連鎖は止められない。

俺は戦う事も出来ず死んで行くだけ。そして次の俺がまた殺される。

せめて、コイツを倒せる武器を持っていればよかった。

夢に見続けた光景。

未知の世界はここにある。倒すべき敵もここにいる。

後足りないとするば……、そう悪を切り裂く剣と敵を倒す勇気だけ。

剣が振り降ろされる。

「うわああああっ！」

思わず目をつぶる。

死が、来ない。

俺の意識が消えない。

まさか、外したのか？

おそろおそろ、俺は目を開ける。

そこには黒い剣があった。俺の目の前で止まっている。
いや、

「剣……？」

もう一本の剣が止めていた。

金色と赤の長剣。黒の意匠が施されており、神聖さと邪悪さの両方を感じさせる。

そんな代物をなぜか俺が握っている。

「おお！今回は当たりかのう！」

離れた所でノルイードが何か言っている。どうやらあのジジイこの剣についても知ってるらしい。

俺にはいまだにさっぱりだが、

「それでも、これで何とかっ！」

握った剣で相手の剣を振り払う。

「なんだこりゃ！めっちゃ軽いっ！」

振り上げた剣は羽のように軽い。思い描いた通りに剣閃を描く。

「これならっ！」

隙を見て立ちあがる。今度は両手で握り、真正面に構える。剣術なんて全く分からないし、剣なんて握ったことも無い。

それでも、この剣はその全ての不足を補って余りある力を持っていた。

「うああああああああああああああああああ」

ただただ剣を振るう。めちゃくちゃだろうとなんだろうといい。力いっぱいただ振るう。

黒い騎士は俺の一撃を防ぐだけで手一杯だった。

弾かれても弾かれても、俺は剣撃を繰り返す。

拮抗していた攻防が徐々に黒い騎士の方に傾き始める。

弾ききれなくなった剣閃が敵の体を掠める。血なんてもちろん出ない。苦悶の表情を見せることも無い。

いけるっ！

俺には勝利の確信が生まれていた。

何度剣の振ったか分からないが微塵の疲れも無い。むしろ一撃ごとに威力が増してる気がする。

「これで終わりだあっ！」

これまでで一番大きく剣を振り上げる。

敵を斬るといふ感覚を捨てる。目の前には何も無い。俺は唯剣を振り降ろすだけだ。

それだけで、この剣は力を得る。

一閃。

敵の剣もろとも、黒い騎士を真つ二つに斬り裂いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3468v/>

--kingsword--

2011年10月9日13時14分発行